

534 実験的肝障害部位への^{99m}Tc-homocysteineの集積性

武田厚司、奥村勇人、岡田昌二（静岡県立大 薬）

癌親和性を有する^{99m}Tc-homocysteine(^{99m}Tc-Hcy)はこれまでの研究により癌組織だけでなく、一般に血管透過性の亢進した部位に集積すると推測されることから、各種肝疾患モデル動物を作製しこの錯体の集積性を調べた。^{99m}Tc-HcyはCCl₄(100μl/100g体重)を腹腔内投与したラットの肝臓に無処理ラットの肝臓の約6倍集積した。このような急性肝障害部位への^{99m}Tc-Hcyの特異的な集積はジメチルニトロサミンを投与した場合、ドライアイス処理した場合にもみられた。一方、3'-Me-DABで誘発した肝癌への^{99m}Tc-Hcyの集積は正常肝より高かったが、CCl₄等で処理した肝より低かった。以上の結果より^{99m}Tc-Hcyの肝疾患診断薬としての可能性が示された。

535 侵襲性線維腫症の核医学診断

太田仁八、琴浦 肇（和歌山赤十字病院放射線科）
遠藤啓吾、小西淳二（京都大学核医学科） 岩橋廉平、
琴浦良彦、山室隆夫（京都大学整形外科）

侵襲性線維腫症は病理学的には良性腫瘍であるが、局所再発をくりかえすことが多く臨床的には悪性としてとりあつかうべきものと考えられる。従ってその進展範囲を正確に描出することは大切である。16例につきガリウム(Ga)テクネチウム標識ブレオマイシン(Tc-BLM)テクネチウム(5価)ジメルカプトコハク酸(Tc-DMS)を用いてその陽性率を検討したところ以下の結果を得た。Tc-DMSは侵襲性線維腫症の検出に有用である。

各種シンチグラフィーの陽性率

Ga	12例	42%
Tc-BLM	11	90%
Tc-DMS	6	100%

536 原発性肺癌のN因子描出におけるTl-201のSPECTの有用性

松野慎介、細川敦之、瀬尾裕之、川崎幸子、佐藤 功
玉井豊理、田辺正忠（香川医大放射線科）
染川雅昭（東芝メディカル）

原発性肺癌34例にTl-201 chloride SPECTを施行し、手術肺にて肺門・縦隔のN因子についてretrospectiveに検討した。症例はN0 22例、N1 6例、N2 5例、N3 1例である。肺門リンパ節でsensitivity 92%、specificity 91%、accuracy 91%、縦隔リンパ節ではsensitivity 100%、specificity 86%、accuracy 88%であった。また上記検査施行例に術前Tl-201 6 mCi静注し、摘出リンパ節/血液のカウント比を計測したところ、転移(+)平均19.1、転移(-)平均9.1と有意差が認められた。病理組織の比較検討を併せて報告する。

537 軟部腫瘍における²⁰¹Tlシンチグラフィーの臨床検討

寺内 隆司、照井 頌二（国立がんセンター放射線診断部RI）

²⁰¹Tl Cl (塩化タリウム)は腫瘍親和性核種としてCox、利波らに報告されて以来、種々の腫瘍に広く用いられ、検討されている。われわれは、組織学的に診断のついた四肢を中心とした軟部腫瘍50例(脂肪肉腫、平滑筋肉腫、横紋筋肉腫、神経原性腫瘍、悪性組織球症等)に対して²⁰¹Tlシンチグラフィーを施行し、⁶⁷Gaシンチグラフィーとの比較等をおこなった。全身シンチグラムのみならず、一部の症例に対してはSPECTも施行し、CT、血管造影等の検査と比較検討した。軟部腫瘍に対する²⁰¹Tlシンチグラフィーの有用性について報告する。

538 Tl-201 SPECTによる肺病巣の鑑別診断

利波紀久、横山邦彦、絹谷清剛、秀毛範至、滝 鈴佳
松成一朗、滝 淳一、瀬戸幹人、中嶋憲一、道岸隆敏
油野民雄、久田欣一（金沢大学核医学科）

悪性腫瘍が疑われた肺病巣69症例にTl-201 SPECTを施行し鑑別診断を試みた。6-10 mCi静注し15分後(Early)と3時間後(Delayed)に撮像し、異常集積が認められた場合には鑑別にDelayed ratioとRetention Indexを測定し用いた。原発性肺癌51例全例、他の肺悪性腫瘍5例中4例、良性病巣13例中5例に異常集積を認めた。Delayed ratioは原発性肺癌で2.20、良性で1.15と有意差を、また、腺癌と扁平上皮癌に有意差を認めた。Retention Indexは原発性肺癌24、良性で-15と有意であり、また、腺癌、小細胞癌と扁平上皮癌に有意差を認めた。本法は肺病巣の鑑別と原発性肺癌の組織診断に非常に有用である。

539 ¹²³I-IMPの気管支動脈内投与による肺癌への集積率とwashout rateの検討

斎藤知保子、池田光、小柴隆藏（市立札幌病院放射線科）

主に原発性肺癌に対する経気管支動脈内抗癌剤投与後、¹²³I-IMPを同一カテーテルより注入し、腫瘍への集積率及びwashout rateの検討を行なった。対象は10例(腺癌5例、扁平上皮癌2例、大細胞癌1例、乳癌転移1例、不明1例)で、12回の検査を施行した。¹²³I-IMPは初回循環によりその支配動脈下のtarget tissueに分布し、原発性肺癌例では支配動脈下の病巣に明瞭な集積を示した。

腫瘍部にROIを設定し、そのcount数から、投与薬剤の集積率の算出が可能であった。投与後1時間までのtime activity curveの検討では、腫瘍部は非腫瘍部に比し、washout rateは早い傾向がみられた。